

米国における児童図書館員の養成とキャリアパス

汐崎順子(慶應義塾大学大学院) [shio-js@slis.keio.ac.jp]

1. 研究の背景と目的

米国で図書館員になるためには、修士レベルでの教育を受けることが必要であり、その教育体制も確立されている。社会において図書館員は専門職として認知され、一定のキャリアパスを持つ。各館種、業務の内容に対応した個別の専門性が必要とされ、児童図書館員にも独自の専門的な知識と技術の習得が求められている。

1980年代の後半から1990年代にかけての急速なメディアの変化、電子化に伴い各分野の図書館員に求められる知識や技術は大きく変化した。Adkins(2004)は、1971年から2001年までの児童図書館員の求人広告の分析と雇用者へのインタビュー調査から、児童図書館員に必要な知識や技術が多様化し、雇用者が求める能力や資質、雇用の条件が変化していることを示した¹⁾²⁾。Sullivan(2005)は、米国の図書界が深刻な人員不足に直面していること、中でも全国的な児童図書館員の不足は大きな問題であり、各公共図書館は競い合って人員の確保に乗り出すようになったと述べている³⁾。

このような背景をふまえ、本研究では、現在の米国において児童図書館員に求められている知識と技術、および職の機会を検証し、その専門性と地位を明らかにすることを目的とする。この目的のために、

専門教育機関における児童図書館員養成の体制を明らかにする。

児童図書館員の職の機会の実態、現場におけるキャリアパスを明らかにする。

という2つの研究課題を設けた。

2. 研究方法

上記の研究課題達成のために、以下の方法を採用した。

2.1 Web調査, 文献調査

まず、児童図書館員養成の教育体制を把握するために、2006年7月に発表されたアメリカ図書館協会(以下ALAと略す)認定校(カナダ6校およびプエルトリコ1校を含む北米57校)のカリキュラムをWeb

上で調査した。ここでは各校で設定されている児童図書館員養成関係の科目(コース)を抽出し、その科目説明やシラバスの記述から個々の内容を調査した。なお学部レベルで設置されている科目は除外し、大学院の科目のみを対象として詳細を分析した。さらに文献およびWeb調査で米国における児童図書館員の雇用の実態、条件、位置づけ等に関する情報を収集した。

2.2 聞き取り調査

上記調査と併せ、児童図書館員の専門職としての意識およびキャリアパスを確認するために、ニューヨークおよびシカゴ公共図書館の児童図書館員や児童図書館員の経歴を持つ関係者等に対して聞き取り調査を実施した。訪問は2007年8月に行い、児童サービスと児童図書館員について非構造的なインタビュー形式で意見を尋ねた。本研究のテーマであるキャリアパス、児童図書館員の専門性については、さらにe-mailでインタビュー内容の詳細の確認と補足を求めた。

3. 結果と考察

ここでは設定した2つの研究課題に沿って結果と考察を示す。

3.1 ALA認定校における児童図書館員養成の教育体制

現在のALAの認定基準⁴⁾は、1992年に定められたものである。基準中には具体的な科目の設置、つまり児童図書館員養成の科目が必置という規定はない。

【関連科目の設置状況】

今回のWeb調査では、対象57校中の55校が児童図書館員養成関連の科目を設置していることが判明した。科目設置数の合計は、全体で249であった。

科目が設置されていないのはカナダのモントリオール大学とマギル大学であり、最多は12科目を持つイリノイ大学であった。全体を見ると4科目を持つ大学数が最も多く(12校, 21.1%)、科目設置数の平均は4.4であった(第1表)。

【各科目内容による分類と検証】

各科目名，内容説明，シラバス等の記述から，資料面を中心とした内容，サービス面を中心とした内容，資料面とサービス面双方の内容，その他(どちらにも当てはまらないもの)の4カテゴリに分類した。さらに各カテゴリ内をサービス対象年代別に，a.児童(乳幼児を含む)，b.ヤングアダルト，c.児童とヤングアダルト，d.その他(特に対象を限定していないもの，判断不可なもの)に細分した。なおのサービスを中心とした内容のカテゴリ内で，ストーリーテリング関係の科目については，その内容の特性上，ほとんどに対象年代の記載がないことと，件数が多いことから，個別に別途数えることとした(第2表)。

明らかになったことを以下に示す。

内容の比重:資料中心>サービス中心

資料面を中心とした科目は136件であり，全体の半数以上(54.6%)を占めた。一方，サービスを中心とした科目は74件(29.7%)であった。この資料中心の傾向は，以前のAllenら(1987)の調査でも指摘されている⁵⁾。

先のカテゴリ分けの第一の鍵となる科目名中の単語には“資料”を表す様々な表現が見られる。うち literature (78: children's literature 26を含む) は最多だが，materials(49)，resources(29)，media(14)もある。アルバータ大学の設置科目『Multimedia Literacies』では，講義の対象として“print, video, audio, CD-ROM, DVD, computer programs, digital games, hypermedia,

internet sites, graphic forms, electronic books, and text-based toys, games and commodities”と幅広い資料を示している。

科目名は literature であっても，内容説明やシラバスには AV 資料, CD や DVD などの電子資料等も併せて取り上げる旨の記載も多く見られた。これにより，文学(児童文学)的な資料に関する知識は以前と変わらず重視されているものの，サービスの対象とする資料は多様化しているといえよう。

poetry(1)，picture book(1)等，資料を限定して単独に取り上げる科目もある。comic books(1)，digital resource(1)等，新しいメディア，電子メディアに対応する単独科目も少数だが存在する。

“サービス”を表す単語では，service(s)の58件が圧倒的に多く，program(ming)は14件，plan(ning)は3件であった。

科目内容:“ストーリーテリング”の重視

サービス中心のカテゴリの中では，ストーリーテリングを単独の科目として扱っている数の多さに注目した。29科目(11.6%)の内訳を見ると，2科目を持つ大学が3校ある。1科目の大学は23校であり，合計26校がストーリーテリング関係の科目を設置している(認定校全体の45.6%)。日本では，唯一の必修科目『児童サービス論』中で，ストーリーテリングは児童図書館員の持つべき技術の一つとして述べられるものの，特別に重視して扱われることはない。これに対し，米国ではストーリーテリングの知識と実践の技術を持つことが必須であ

第1表. 児童関係科目の設置数

科目数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	10	11	12	合計
学校数	2	1	11	7	12	8	7	3	4	1	0	1	57
%	3.5%	1.8%	19.3%	12.3%	21.1%	14.0%	12.3%	5.3%	7.0%	1.8%	0.0%	1.8%	100.0%

第2表. 各科目の内容

資料中心				サービス中心				資料とサービス				その他	合計	
児童	YA	両方	他	ストーリーテリング	児童	YA	両方	他	児童	YA	両方			他
66	31	35	4	29	9	8	26	2	15	10	7	2	5	249
136				74				34						
54.6%				29.7%				13.7%				2.0%	100.0%	

ること、重要なものとして認知されていることが分かった。

サービス対象年代:乳幼児から YA まで

サービスの対象年代を表す単語では child/children(95)と young adult(s)(65)が多く、他に youth(26), adolescent(s)(8), teens(3)等がある。なお各語の示す実際の年齢層については、共通する明確な定義はない。各科目で具体的に対象年齢や学年を示す例も見られたが、年齢や学齢の区切り方は統一されていない。この他に、early childhood(3), very young children(2)等、乳幼児などの幼い年代を示すものもある。

これらの科目名と内容説明からはサービスの対象とする年齢層の広がり分かる。シカゴやニューヨークでの聞き取り調査でも、近年は乳幼児に対するサービスへの要求が急速に高まっているとの指摘があった。

3.2 職の機会とキャリアパス

【採用情報・条件】

ALA は独自の雇用情報サイトを持つ。多くの ALA 認定校も同様に就職関係の情報サイトを設けている。ここでは限定的な狭いカテゴリ、つまり Children's Librarian や、Youth Service Assistant 等、専門的分野としての募集が見られる。各資格要件、能力についても専門的な知識や技術等の明記があり、雇用者が専門的な人材として、児童図書館員を求めていることが分かる。

Walter(2001)は、1997年の状況を概観し、児童図書館員の深刻な不足の原因として、児童図書館員の軽視と賃金格差をあげている。この年の初任給は、一般の公共図書館員の平均年収 30,270\$に対して、児童図書館員は 27,896\$という数字が示された⁶⁾。

米国労働統計局の調査によれば、2005年の教育・訓練・図書館関係分野の雇用は 8,078,500 人で平均年収は 43,450\$である。うち、図書館員の雇用数は 146,740 人、平均年収は 49,110\$と分野全体の平均より高い数字であった⁷⁾。しかしここでは児童図書館員独自の数字は明らかではない。

聞き取り調査を行ったシカゴ公共図書館では児童図書館員の給与、地位、昇進の機会とは他種図書館員と全く同じのことであった。このシカゴでは児童図書館員の数が

不足しているため、恒常的に募集をしている。児童図書館員は人気のある職であり、求職者は多いが、雇用の基準が高く人員の確保が難しいのが現状であるという。

【児童図書館員のキャリアパス】

今回の聞き取り調査では、“明確な目標を持って大学院に入学し・学び・就職する”という姿勢、彼らの受け皿となる職場の状況が見られた。その一例としてシカゴ公共図書館のアシスタント・ディレクターのキャリアパスを示す。(次頁、第1図も参照)

事例:現在シカゴ公共図書館に勤める 児童図書館員のキャリアパス

1. ストーリーテリングとの出会い

最初は教員を目指し、英文学で博士号を取得。この時ストーリーテリングに興味を持ち、大学でコースを単独に受講。

2. 教員時代の体験、転職の決意

西アフリカで英語教師として働く間に現地で子どもに本を届ける体験をした。この時の子どもの様子に本の力を感じ、転職を決意。…ストーリーテリングとの出会いと西アフリカでの体験が、転職を決意させた二大イベントであった。

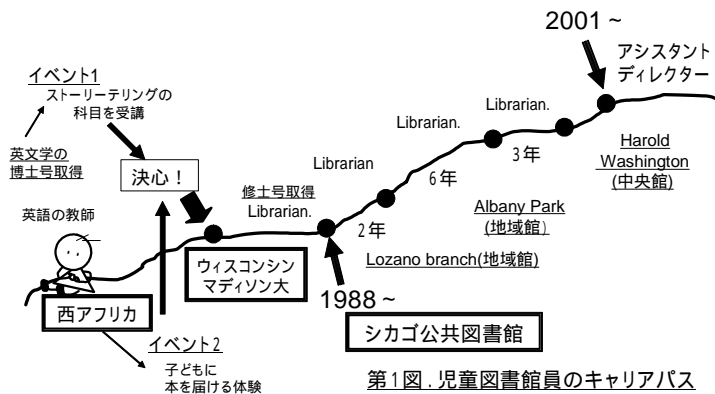
3. 修士号取得、児童図書館員への転職

ウィスコンシン・マディソン校で修士号を取得。自分の能力を最大限に活かせる職場で働きたいと考え、シカゴ公共図書館を選択。…大都会の図書館でこそ多種多様な可能性が見出せると考えた。

4. 児童図書館員として ~現在まで

新任者の階級 Librarian・ から(2年)、Librarian・ (6年)、Librarian・ (3年)を経て Librarian・ に昇格(この間2地域館に勤務)。2001年に中央館の Assistant Director of Children's Services になる。…働き甲斐のある職場で、シカゴ市民への自分の使命と働く意義を強く感じている。

児童図書館員になるために学び、就職する彼らは専門職としての意識が高く、仕事



第1図. 児童図書館員のキャリアパス

への高い責任感、使命感、愛着と誇りを持っている。雇用基準の高さ、タイミングのよし悪しは存在するが、各々の能力が十分活かせる職場を自らの意思で選択している。

調査対象としたニューヨークおよびシカゴ等、大都市の図書館においては中央館が多くの地域館を束ねる組織的な運営がなされているため、児童図書館員としての昇進の道筋も見られた（地域館の一図書館員から、中央館の児童サービス部門や児童サービス中心館の長となるなど）。しかし一方で、中小都市の公共図書館では、児童図書館員としてキャリアアップしていける道筋が見えないとの指摘もあった。

また、大都市の図書館であっても、児童図書館員の昇進の道筋はそう広くないこと、つまり相応の地位に登ることができるのは限られた少数であることも確かである。キャリアアップを目指して、児童サービス部門から他部門へ移る事例もあることが分かった。しかし児童図書館員として継続して働くか、他部門の図書館員になるかは個々人の判断に委ねられているという。

4. まとめ

本研究では、米国において児童図書館員は専門的な分野の職とみなされていること、大多数の ALA 認定校に児童図書館員養成のための科目が設置されていることが分かった。各科目内容から、literature を中心とした児童資料の知識の習得が中心に置かれているのは以前と同様だが、これに加えて新しいメディアに対応する知識と技術の習得、より幅広い年代へのサービスを考え

た展開もなされている。またストーリーテリングは、個別に専門的技術として重点が置かれていることも明らかとなった。

今回の聞き取り調査では、現場の児童図書館員の専門職としての高い意識、仕事に対する積極的な姿勢を確認することができた。併せて彼らが経験、専門職としてのキャリアを

積み重ねていく道筋も明らかとなった。しかし今回の対象者は、米国2大都市の業績の高い公共図書館の児童図書館員、自身の経歴を活かしてキャリアアップした者であり、いわば成功的な事例であるといえる。

米国における児童図書館員の専門性と位置づけをより明確に示すためには、さらに各都市の様々な立場にいる児童図書館員の実態に関する調査を併せて行い、比較と検証を行うことが必要であると考えられる。

【謝辞】本研究は、平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「公立図書館における児童サービスの意義及び理念の総合的研究」の一部です。調査にご協力くださった皆様に感謝いたします。

【注・引用文献】

- 1)Adkins, Denice. Changes in Public Library Youth Services: A Content Analysis of Youth Services Job Advertisement. Public Library Quarterly. Vol.23, No.3/4, 2004, p.59-72
- 2)Adkins, Denice; Esser, Denice. Literature and Technology Skills for Entry-Level Children's Librarians; What Employers Want. Children and Libraries. Vol.2, No.3, 2004, p.14-21.
- 3)Sullivan, Michael. Fundramantal of Children's Services. Chicago, ALA. 2005, 255p.
- 4)Standards for Accreditation of Master's Programs in Library and Information Studies 1992. <http://www.ala.org/ala/accreditation/accredstandards/standards.htm>【最終確認日:2007-10-16】
- 5)Allen, Melody Lloyd.; Bush, Margaret. Library Education and Youth Services: A Survey of Faculty, Course Offerings, and Related Activities in Accredited Library Schools. Library Trends, Vol.35, No.4, 1987, p.485-508.
- 6)Walter, Virginia A. Children and Libraries. Chicago, ALA. 2001, 155p.
- 7)Occupational Employment and Wages, May 2005. 25-4021librarians. <http://stats.bls.gov/oes/2005/may/oes254021.htm>【最終確認日:2007-10-16】